

# 建築と歴史の現在

石上純也×長谷川豪×長島明夫 (司会)

in 法政大学 55/58年館 (設計=大江宏/解体予定)

2015年 6月 27日 (土) 15:00 ~ (14:30 開場)

2015年3月、期せずして同様のテーマを掲げた2冊の本——『長谷川豪 カンパセーションズ——ヨーロッパ建築家と考える現在と歴史』と『建築と日常』No.3-4 (特集: 現在する歴史) が出版されました。出来上りの姿形は異なるものの、いずれも現代における建築と歴史のあり方を問題にしています。

このイベントはそれら2冊の思考の流れを汲むものです。『カンパセーションズ』からはヨーロッパの建築家たちと歴史をめぐって対話を重ねた長谷川豪氏、『建築と日常』からは同誌編集発行者の長島のほか、国内外で活躍する石上純也氏が参加し、さらに会場には大江宏設計の法政大学 55/58年館を使用します。大江宏もまた「現在する歴史」特集の重要人物の一人であり、法政大学 55/58年館は、今「建築と歴史の現在」を考える場に相応しい建築です。多くの方々の参加によって、その歴史的な空間が生き生きと現在に現れてくることを期待しています。(長島明夫)

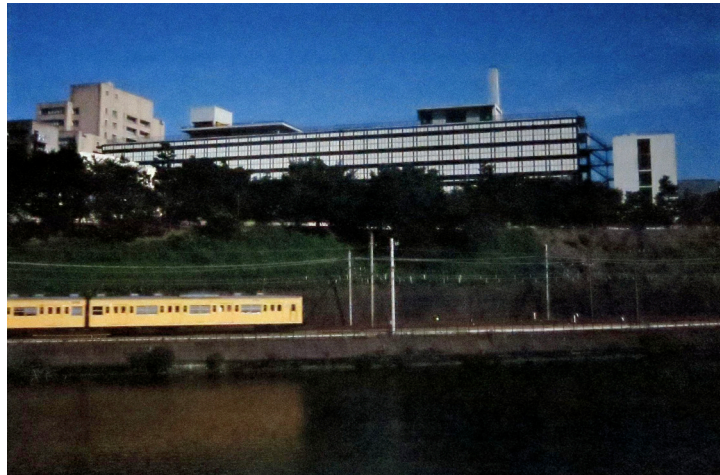
-----  
[会場] 法政大学 市ヶ谷キャンパス (千代田区富士見 2-17-1) 55/58年館 3階 833教室

[定員] 300名 | 予約不要・当日先着順 | インターネット中継なし

[参加費] 無料 | ただし右の2冊のどちらかを持参し、入場時にご提示ください。両方をご提示の方には特典を差し上げます (法政大学の学生は学生証の提示で入場可)

[主催] 建築と日常 [協力] 55/58きおくプロジェクト / LIXIL 出版

-----  
※当日13:00から、55/58きおくプロジェクト (代表: 大江新) による 55/58年館見学ツアーを開催します。こちらまぜひご参加ください (ツアーに参加しなくても建物の見学は可能です)。集合場所: 外濠校舎 1階エントランスホール (エスカレーター付近)



法政大学 55/58年館 | 大江宏の初期代表作。戦後まもなく、資金や資材の不足のなかで市ヶ谷キャンパス復興計画の一環として建設された。端整なカーテンウォールのファサードが外濠の風景を形成する。老朽化に起因する様々な問題を理由に、2014年3月より建替工事が進行中。参照: 法政大学 55/58年館の再生を望む会 HP (<http://www.55-58saisei.sakura.ne.jp/>)



『長谷川豪 カンパセーションズ——ヨーロッパ建築家と考える現在と歴史』LIXIL出版、B5判、276頁 (バイリンガル)、3,000円+税

いま建築をつくることと歴史に向き合うことについて、ヨーロッパの建築家6組に長谷川豪が問いかける。[インタビュー] アルヴァロ・シザ | ヴアレリオ・オルジャティ | ペーター・メルクリ | アンヌ・ラカトン & ジャン＝フィリップ・ヴァッサル | パスカル・フラマー | ケルステン・ゲールス & ダヴィッド・ファン・セーヴェレン



『建築と日常』No.3-4 合併号 (特集: 現在する歴史) 編集・発行=長島明夫、A5判、208頁、1,800円+税 <http://kentikutonitijou.web.fc2.com>

「今、ここ」が断片化・絶対化する社会で、建築を介して歴史が現在することの意味を顧みる。時空を超え、大江宏 (1913-89)、吉田健一 (1912-77) らを生き生きと誌面に召喚。[インタビュー] 香山壽夫 | 富永讓 | 坂本一成 [作品] atelier nishikata [批評] 岡崎乾二郎 [アンケート] 横文彦 | 藤森照信 | 井上章一 | 畠山直哉 | 石上純也ほか (表紙: 大江宏による歴史年表)

# 石上純也

「建築」にはその内側に、何かしらの「古さ」が備わっていなければならないと思っています。それが、ついこの間出来上がったものでも、ずっと昔から存在するものであっても、どこかに古さを感じられるということはとても重要です。

電子機器や電気製品などは、最先端のものにそれなりに大きな衝撃を受けると、場合によっては、今まで見たこともない装置によって生活の価値観が変えられることもあります。

しかしながら、建築に関していうと、(僕にとってはということかもしれませんが)どんなに新しい革新的な提案であったとしても、どこかしらに「建築って昔からこういうものだよ」というような雰囲気や備えていることが必要なのだと思います。

それは、建築が道具ではなく僕たちの環境のようなものだからなのかもしれません。(『建築と日常』No.3-4, p.42)

いしがみじゅんや | 建築家。1974年生。2000年東京藝術大学大学院建築専攻修士課程修了、妹島和世建築設計事務所勤務を経て、2004年石上純也建築設計事務所設立。2009年《神奈川工科大学 KAIT 工房》にて日本建築学会賞作品賞を受賞。http://www.jnyj.jp/

# 長谷川豪

「新しさ」を希求する人間の欲望はかけがえのないものだ。価値観の固定化、画一化を相対化するためにも「新しさ」は人間社会にとって必要なものである。しかし違和感を感じるのは、「新しさ」の希求が既存の乗り越え＝「ポスト」にすり替わりそれが目的化してしまうときである。特に日本の現代建築はたびたび、あたかも師や世代の乗り越えによって歴史が創出されているかのように語られる。知性は集団ではなくある偉大な個人に帰するものであり、偉大な個人史の総和が歴史をつくとでもいうような感覚。次はどういう建築がくるのか？ 次に注目すべき建築家は誰だ？ などと、いつのまにか日本の現代建築は「ポスト」というイデオロギーに支配され、われわれをきわめて近視眼的な歴史観に陥らせてきたのではないか。

(『長谷川豪 カンパセーションズ』p.8)

はせがわごう | 建築家。1977年生。2002年東京工業大学大学院建築学専攻修士課程修了(塚本由晴研究室)、西沢大良建築設計事務所勤務を経て、2005年長谷川豪建築設計事務所設立。2012-14年メンドリシオ建築アカデミー(スイス)客員教授。2015年博士(工学)の学位を取得。http://ghaa.co.jp/

# 長島明夫

いま日常生活を送っていて、様々な面で〈歴史的感觉〉が希薄になっている気がしています。昔の人だったら、そんなことをしたらはしたないとか、お天道様が見ているとって憚られるようなことでも、「今、ここ」でよければ構わないという態度をよく目にします。「今、ここ」が歴史的な連続から断絶して、断片化、絶対化している。歴史は頻繁に語られますが、単に自己の主張を正当化する理屈として用いられることが多いように思います。それが政治の領域などでもかなり切実な問題ではないかと感じていて、歴史特集を組むことにしました。建築をめぐる歴史を考えることが、現実に対して一つ有効なのではないかと思ったわけです。(『建築と日常』No.3-4, p.6)

ながしまあきお | 編集者。1979年生。2001年明治大学建築学専攻修士課程修了、出版社エクスマレッジ勤務を経て、2009年フリーランスとして個人雑誌『建築と日常』創刊。



# 大江宏

建築家は現代に建築を作りつつも、自らの目を過去に立たせることも、また異文化の世界におくこともできる十分な自由さを有する存在でなければならない。しかも、なおそこへ他力的に帰依しきってしまう事なく、現代の人間でありつづけることこそが肝要である。時空を超えた建築の全集積と同時に、現代の技術や社会を同じように見渡し得る視野を備え、しかも自己の思考の広がりをも自ら見返すことのできる存在が建築家でなければならない。(『建築と日常』No.3-4, p.54 | 初出:『総論』『新建築学大系1 建築概論』彰国社、1982年)

おおいひろし | 建築家。1913年生。父・新太郎は日光東照宮の修理や明治神宮の造営に携わった建築家。1938年東京帝国大学建築学専攻卒業(同級に丹下健三ら)、文部省宗教局保存課、三菱地所建築部を経て、1946年弟の透・修と大江建築事務所を設立。1950年～法政大学工学部建設工学科助教授(53年～教授、84年～名誉教授)。1959年《法政大学校舎》にて文部大臣芸術選奨および日本建築学会賞作品賞を受賞。1989年没。建築家としてモダニズムの単線的な歴史認識を批判、歴史意匠の重要性を説き、様々な様式の混在併存・渾然一体の建築を追求した。

[写真] 法政大学 58年館竣工式にて(左から、丹下健三、大江宏、大江修、岡本太郎)